〔南遊紀行〕諸州めぐり〔四紀伊〕和歌浦に〔和歌山より一里あり〕東照宮右の山上に立玉ふ、宮作大にして甚美麗也、神領多く僧舍六坊有、是より和歌浦を望めば其景すぐれたり、今日は此邊櫻さかりにさきて光景もいとまされり、〔○中略〕是より少右の方へ行て漁人の町を過、和歌の浦の海べたに出づ、おきに地の島おきの島みゆ、和歌の浦は南をうけて入海なり、俗説に此浦におなみ有て、めなみなし、故に片男波と云、此説非也、男波とは大なみなり、め波とは小波也、われもとより其説を信せず、あめつちの内、などてかゝるつねの理にたがひぬる事やあるべきとおもひしかば、かへりて後人にもかたり其迷をさとさんため、わざと此濱邊にやすらひて心をとめて久しく見侍りしに、いさゝか俗説のごとくにはなし、只よのつねの所のごとくおなみめなみともにいくたびもたち來れり、和歌の浦にしほみちくればかたをなみと、古歌によめるは、俗説の意にあらず、しほみち來りて潟なくなると云意也、其故あしべの方にたづ鳴來れるといふ意明らかにきこゆ、萬葉第六卷に此歌あり、滷乎無美とかけり、此文字にて歌の意明らかなり、乎はやすめ字也、しほみちくれば潟なくなると云意也、いとまなみといへるもいとまなしと云意なり、此類萬葉の歌におほし、此浦の佳景聞しにまさりて目を驚かせり、我此景色をむさぼりみて海邊に躊躇し、去事をわすれて時をうつせり、〔○中略〕近年新しく名付し和歌の浦八景と云は、東照宮、天滿宮、玉津島、紀三井寺、妹脊山、片男波、〔又かたを涙と云在所あり〕布引の松、蘆邊寺是なり、蘆邊寺は妹脊山の南辨才天のある所也、是赤人の歌によりて名づけしならん、八景の内玉津島を除ては、いづれも古來の名所にあらず、

〔武德編年集成三十一〕天正十三年三月、秀吉、彼城〔○岡山卽和歌山〕ヲ監臨ノ其序ニ玉津島ヲ遊覽シ、茶店ヲ營ミ諸將ヲ享シ、軍旅ノ勞ヲ犒ヒ、且倭歌ヲ賦ス、

打出テ玉津島ヨリナガムレバミドリ立ソフ布引ノマツ

〔熊野遊記〔下〕〕夫紀之勝、熊野以幽奇勝者也、弱浦以濃麗勝者也、俱亡論爲絶景焉、然四方之士遊弱浦